

資治通鑑 第 161 卷

【梁紀十七】 著雍執徐，一年。

■梁、●西魏、**東魏**東魏、続国訳漢文大成 經子史部 第 9 卷 206p

高祖武皇帝^{十七}太清二年（戊辰，548年）

【侯景は敗れ壽陽に逃げ込む】

東魏■**〔侯景は慕容紹宗に破られ残卒八百〕**春，正月，己亥（35-29+1=7日），慕容紹宗は鐵騎五千を以て侯景を夾撃し，景は其の衆を誑^{たが}かして曰く、

「汝の輩の家屬は已に高澄の殺す所と為る。」

衆は之を信ず。紹宗は遙に呼びて曰く、

「汝の輩の家屬は並びて完くし，若し（東魏に）歸れば，官勳は舊の如し。」

發（髮）を被り北斗に向かいて誓いを為す。景の士卒は南に渡るを楽しまず，其の將の暴顯（昨年侯景に捕えられる）等は各々部する所を帥いて紹宗に降る。景の衆は大いに潰え，争いて渦水に赴き，水は之が為に流れず。景は腹心數騎と與に硤石より淮を濟り，稍く散卒を収め，歩騎八百人を得，南に小城を過ぎ，人は陣（城上の女牆）に登り之を詬^{のの}りて曰く、

「跛奴（侯景は右足が偏短なり）！何を為さんと欲する邪！」

景は怒り，（9-207p）城を破り，詬る者を殺し而して去る。晝夜兼行し，追軍は敢えて逼らず。（人をして）紹宗に謂って曰わ使む、

「景が若し擒に就けば，公復た何の用あらん！」

紹宗は乃ち之を縱^{ゆる}す。（胡三省曰く、人臣苟も才有れば、必ずを寇を養いて以て資と為す。東魏の世、彭樂・慕容紹宗は同一轍なるのみと）

■辛丑（37-29+1=9日），尚書僕射の謝舉を以て尚書令と為し，守吏部尚書の王克を僕射と為す。

■**東魏**■**〔梁軍は懸瓠項城を放棄〕**甲辰（40-29+1=12日），豫州刺史の羊鴉仁（去年鎮す）は東魏の軍が漸く逼るを以て、

「糧運繼がず」

と稱し，懸瓠を棄て，義陽に還る。殷州刺史の羊思達（去年鎮す）も亦た項城を棄てて走る。東魏の人は皆な之に據る。上は怒り，鴉仁を責讓す。鴉仁は懼れ，後期を啟申し，軍を淮上に頓す（敢えて義陽に還らず）。

■**〔侯景は策を以て壽陽に入城〕**侯景は既に敗れ，適く所を知らず，時に鄱陽王の范は南豫州刺史に除せられ，未だ至らず（去年蕭淵明を遣わして澎城を攻めしめ、範を以て代わりて壽陽に鎮せしむも至らず）。馬頭戍主の劉神茂は，素より監州事の韋黯の容れざる所と為り，景の至るを聞き，^{ことさら}故に往きて之を^{うかが}う（賓客を歡迎），景は問いて曰く、

「壽陽は此を去ること遠からず，城池は險固なり，往きて之に投じんと欲す，韋黯は其れ我を納れん乎？」神茂は曰く、

「黯は城に據ると雖も，是れ監州なる耳。王が若し馳せて近郊に至れば，彼は必ず出で迎えん，因りて而して之を執れば，以て事を集^なす可し。城を得る之後，徐に以て啟聞せよ，朝廷は王の南歸するを喜び，必ず責めざる也。」

景は其の手を執りて曰く、

「天の教え也！」

神茂は請いて歩騎百人を帥いて先ず郷導を為す。壬子（48-29+1=20日）、景は夜壽陽の城下に至る。韋黯は以て賊と為す也、（士卒に）甲を授けて陣に登らしむ。景は其の徒を遣わして告げて曰く、

「河南王は戦い敗れ來たりて此の鎮に投ず、願わくは速^{すみやか}に開門せよ。」

黯は曰く、

「既に敕を奉じず、敢えて命を聞かず。」

景は神茂に謂って曰く、

「事は諧^{ととの}わず矣。」

神茂は曰く、

「黯は儒に而して智は寡なし、説き下す可き也。」

乃ち壽陽の徐思玉（壽陽の人、東魏に事え侯景に従う）を遣わして入りて黯に見えしめて曰く、

「河南王は朝廷の重き所と為る、君は知る所也。今利を失い來たりて投ず、何ぞ受けざるを得ん？」

黯は曰く、

「吾之命を受けるは、唯だ城を守るを知るのみ。河南は自ら敗れ、何ぞ吾が事に預からん！」

思玉は曰く、

「國家は君に付すに閫外之略を以てす、今君は肯えて城を開かず、若し魏の追兵（續は兵）來たり至れば、河南は魏の殺す所と為る、君は豈に能く獨り存するや！縱使或は存するとも（續は欠如）、何の顔ありてか以て朝廷を見ん？」

黯は之を然りとす。思玉は出でて報じ、景は大いに悦びて曰く、

「我を活かす者は、卿也！」

癸丑（49-29+1=21日）、黯は開門して景を納れ、景は其の將を遣わして分けて四門を守らしめ、黯を詰責し、將に之を斬らんとす。既に而して手を撫でて大いに笑い、置酒して歡を極める。黯は、睿之子也。

■ 〔何敬容は侯景の危険を見抜く〕 朝廷は景の敗れるを聞き、未だ審問するを得ず。或は云う、

「景は將士と盡く没す。」

上下は鹹な以て憂と為す。侍中、太子の詹事の何敬容は東宮に詣り、太子は曰く、

「淮北は始めて更に信有り、侯景は定めて身を免かるるを得ると、傳える所の如くならず。」

敬容は對えて曰く、

「景が遂に死するを得れば、（9-208p）深く朝廷之福と為すべし。」

太子は色を失い、其の故を問い、敬容は曰く、

「景は翻覆の叛臣なり、終に當に國を亂す。」

太子は玄圃（蕭齊以來東宮にあり。崑崙の山三級、一を樊桐といい、二を玄圃といい、三を屬城という。太帝の居る所。東宮は帝室に次ぐ）に於いて自ら《老》、《莊》を講じ、敬容は學士（秘書省に撰史學士あり）の吳孜に謂って曰く、

「昔西晉は玄虛（老莊思想）を祖尚（手本）し、中原をして胡、羯に淪ま使む。今東宮は復た爾り、江南も亦た將に戎と為らんとす乎！」

■ 〔蕭介の諫言にも帝は耳を貸さず〕 甲寅（50-29+1=22日）、景は儀同三司の於子悦を遣わして馳せて敗を以て聞し、並せて自ら貶削を求める。優詔して許さず。景は復た資給を求め、上は景の兵の新たに破れるを以て、未だ移易するに忍びず。乙卯（51-29+1=23日）、即ち景を以て南豫州牧と為し、本官は故の如し。更に鄱陽王の范を以て合州刺史と為し、合肥に鎮せしむ。光祿大夫の蕭介は上表して諫めて曰

く、

「竊に聞く、**侯景**の渦陽に敗績するを以て、隻馬は命に歸す、**陛下**は前禍を悔いず、復た救して容納す。臣は聞く、凶人之性は移らず、天下之惡は一也。昔**呂布**は**丁原**を殺し以て**董卓**に事え、終に**董**を誅し而して賊と為る。**劉牢**は**王恭**に反き（事は晉の安帝紀にあり）て以て晉に歸し、還りて晉に背きて以て妖を構える。何となれば者？狼子の野心は、終に馴狎之性無く、虎を養う之喩え、必ず饑噬之禍いを見る。**侯景**は凶狡之才を以て、**高歡**の卵翼之遇（左傳に、楚の令尹子曰く、勝ち卵の如し、予翼してこれを長ぜりと）を荷ない、位は台司を忝くし、任は方伯に居り、然るに而して**高歡**の墳土未だ干かざるに、即ち還つて反噬す。逆力は逮ばず、乃ち復た死を關西に逃れる。**宇文**は容れず、故に復た身を我に投ず。**陛下**は前者に細流に逆わざる所以（李斯が秦王に上る書に曰く、江海は細流を擇ばず、故に能く其の深きを就すと）は、正に屬國の降胡以て匈奴を討つ（漢は邊郡に屬國を置き、以て降胡をおき、匈奴を偵伺せしむ）に比さんと欲し、一戰之效を獲るを冀う耳。今既に師を亡ぼし地を失い、直に是れ境上之匹夫なり、**陛下**は匹夫を愛し而して與國（東魏の事）を棄てる、臣は竊に取らざる也。若し國家が猶ほ其の更鳴之辰、歲暮之效を待てば、臣は竊に惟うに**侯景**は必ず歲暮之臣に非ず。郷國を棄てること屢を脱するが如く、君親に背くこと芥を遺てるが如し、豈に遠く聖徳を慕い、江、淮之純臣と為るを知らん乎！事跡は顯然たり、惑いを致す可く無し。臣は朽老して疾い侵し、應に朝政に干預せず。但だ**楚囊**將に死せんとし、郢に城きづく（左傳に、楚の令尹子囊は將に死せんとし、子庚に遺言す、必ず郢に城きづけと）之忠有り、**衛魚**は亡するに臨みて、亦た尸諫之節有り（衛の史魚は己の屍をもて諫めて、蓬伯玉を進め、彌子瑕を退く。事は孔子家語に詳かなり）。臣は忝くも宗室の遺老と為り、敢えて**劉向**（30 卷漢の成帝陽朔二年にあり）之心を忘れんや！」

上は其の忠を歎息し、然るに用いる能わず。介は、**思話**（宋の元嘉に方任に歴當す）之孫也。

【梁東魏和睦で侯景叛乱決意】

東魏 己未（55-29+1=2 7 日）、東魏の大將軍の**澄**は鄴に朝す。

●魏は開府儀同三司の**趙貴**を以て司空と為す。魏の皇孫は生まれ、大赦す。（9-209p）

東魏 二月、東魏は其の南兗州刺史の**石長宣**を殺す、**侯景**之黨を討つ也。其の餘の**景**が脅す所と為り従う者は、皆な之を赦す。

東魏 ■ **【東魏と梁の和睦】** 東魏は既に懸瓠、項城を得、悉く舊境を復す。大將軍の**澄**は數々書移（檄を遷す）を遣わし、復た通好を求める。朝廷は未だ之を許さず。**澄**は貞陽侯の**淵明**に謂って曰く、

「先王は**梁主**と和好すること、十有餘年。聞く、彼の佛に禮するの文に云わく『**魏主**、並びに**先王**に及ぶ為に奉じる』と。此れ乃ち**梁主**の厚意なり。謂わざりき一朝にして信を失い、此の紛擾を致さんとは、**梁主**の本心に非ざるを知る、當に是れ**侯景**が扇動する耳、宜しく遣使して咨論すべし。若し**梁主**が舊好を忘れざれば、吾も亦た敢えて**先王**之意に違わず、諸人は並びに即ち遣り還さん、**侯景**の家屬も亦た當に同じく遣るべし。」

淵明は乃ち省事の**夏侯僧辯**を遣わし上に奉啟し、稱す、

「勃海王（高澄）は弘厚の長者なり、若し更に通好すれば、當に**淵明**の還るを聽すべし。」

上は啟を得、流涕し（高澄の策に落ちる）、朝臣と之を議す。右衛將軍の**朱異**、御史中丞の**張綰**等は皆な曰く、「寇を靜め民を息め、和するは實に便と為す。」

司農卿の**傅岐**は獨り曰く、

「**高澄**は何事ぞ和を須いん？必ず是れ間を設けるなり、故に貞陽に命じて遣使し、**侯景**をして自ら疑わ

令めんと欲す。景の意は安ぜず、必ず禍亂を圖らん。若し通好を許せば、正に其の計中に墮ちん。」(胡三省曰く、侯景の反覆は何敬容・蕭介はこれを知る。高澄の姦詐は傅岐これを知る。梁朝果たして人無きに非ざるなり。武帝は決擇してこれを用いる能わざるのみと)

異等は、

「宜しく和すべし」

と固執し、上も亦た兵を用いるを厭い、乃ち異の言に従い、淵明に書を賜りて曰く、

「知る高大將軍が汝を禮すること薄からず、啟を省し、甚だ以て懷^{うれ}いを慰む。當に別に行人を遣わし、重ねて鄰睦を敦くすべし。」

東魏■**「侯景は兩朝和睦を知り画策」**僧辯は還り、壽陽を過ぎ、侯景は竊に訪れて之を知り、攝問(その人を収録してこれを問う)、具に服す。乃ち淵明に答える之書を寫し、上に陳啟して曰く、

「高氏の心は鳩毒を懷き、怨みは北土に盈つ、人は願いは天に従い、歡の身殞越(死ぬ)す。子の澄は惡を嗣ぎ、滅を計り時を待ち、此の一勝(渦陽の勝ち)を昧^{むさぼ}る所以の者は、蓋し天(続による、大より良し)は澄の心を蕩^{うご}(動き散じる。左傳に、楚の武王將に死せんとす、其の夫人は鄧曼に告げて曰く、余が心蕩けりと。鄧曼曰く、王の祿盡きたるが、盈ちて蕩くは、天の道なりと)けり以て凶毒を盈たしむる耳。澄は苟くも行いは天心に合えば、腹心は疾無し、又た何ぞ急急に璧を奉じて和を求めん？豈に秦(西魏、關中を秦とする)の兵其の喉を扼し、胡騎(柔然)其の背に迫るを以てせずや、故に辭を甘くし厚幣を厚くし、安を大國に取る。臣は聞く『一日敵を縦せば、數世之患なり』(晉の先軫の言)、何ぞ高澄一豎を惜しみ、以て億兆之心を棄てるや！竊に以うに北魏の安強は、天監之始めに過ぎたるは莫し、鐘離之役(146 卷天監六年にあり)に、匹馬は歸らず。其の強きに当たりて也、陛下は尚ほ伐ち而して之を取る。其の弱きに及びて也、慮に反し而して之に和す。(9-210p) 已成之功を捨て、垂死之虜を縦し、其の命を假りて強梁せ使め、以て後世に遺すは、直に愚臣の腕を扼するのみに非ず、實に亦た志士心を痛ましむ。昔伍相は吳に奔り(左傳に、楚は伍奢を殺し、其の子は吳に奔る。吳主闔閭は之を用い、楚を破り郢に入る)、楚邦は卒に滅びる。陳平は項を去り(漢の高帝紀)、劉氏は用いて興る。臣は才は古人に劣ると雖も、心は往事に同じ。誠に知る、高澄は賈が翟に在るを忌み、會が秦に居るを惡み(左傳に、晉の靈公の初め、賈季は翟に奔り、隨會は秦に奔る。秦人は其の謀を用い、晉人之を患う。六卿は諸浮くに相見る。趙宣子曰く、隨會は秦に在り、賈季は翟に在り。難は日に至る。將に之を若何せんとすると)、盟を求め和を請い、其の患を除かんことを冀うと。若し臣死して益有れば、萬殞すとも辭無し。唯だ恐る、千載、良史を穢す有らんことを。」

景は又た書を朱異に致し、金三百兩を餉る。異は金を納れ而して其の啟を通じず。

■**「侯景の懇願空しく、遂に叛意を抱く」**己卯(15+60-59+1=17日)、上は遣使して澄を吊^{とむら}う。景は又た啟して曰く、

「臣は高氏と、罅隙^{きんげき}已に深し、仰ぎて威靈に憑り、仇恥を雪がんことを期す。今陛下は復た高氏と連和し、臣をして何れの地に自ら處ら使むや！乞う後戰を申ね、皇威を宣暢(明らかに述べる)せん！」

上は之に報じて曰く、

「朕は公と大義已に定まる、豈に成り而して相い納れ、敗れ而して相い棄てる有らん乎！今高氏は使い有りて和を求め、朕も亦た更に武を偃^ふせんと思う。進退之宜は、國に常制有り。公は但だ清靜にして自ら居れ、慮りに勞する無かれ也！」

景は又た啟して曰く、

「臣は今糧を蓄め衆を聚め、馬に秣^{まぐさ}かい戈を潜め、日を指し期を計り、趙、魏を克清せんとす、軍出でて名無く容からず、故に願わくは陛下を以て主と為す耳。今陛下は臣を遐外に棄て、南北は復た通じ、將

に恐れんとす、微臣之身は、高氏之手を免かれず。」

上は又た報じて曰く、

「朕は萬乗之主と為り、豈に信を一物に失う可けんや！想うに公は深く此の心を得ん、復た啟有るを勞せざる也。」

景は乃ち詐りて鄴中の書を為り、貞陽侯を以て景に易えんことを求む。上は將に之を許さんとす。舍人の傳岐（先に中書通事舍人を兼ね、大僕司農卿に累進し、舍人も兼ねる）は曰く、

「侯景は窮するを以て義に歸す、之を棄てるは不祥なり。且つ百戰之餘なり、寧ろ肯えて手を束ねて繫を受（（続は就））けんや！」

謝舉、朱異は曰く、

「景は奔敗之將なり、一使之力なる耳。」

上は之に従い、復書して曰く、

「貞陽が旦^{あした}に至れば、侯景は夕に返らん。」

景は左右に謂って曰く、

「我は固より吳老公（蕭衍）の薄心腸（薄情）を知る！」

王偉は景を説いて曰く、

「今は坐して聽くも亦た死し、大事を擧げるも亦た死す、唯だ王は之を圖るべし！」

是に於いて始めて反計を為し、屬城の居民は、悉く召募して軍士と為し、輒ち市估（商業税）及び田租を責めるを停め、百姓の子女は、悉く以て將士に配す。

東魏三月，癸巳（29-28+1=2日），東魏は太尉の襄城の王旭を以て大司馬と為し，開府儀同三司の高岳を太尉と為す。

東魏●**〔高澄は洛陽に至る〕**辛亥（47-28+1=20日），大將軍の澄は南して黎陽に臨み，虎牢より河を濟りて洛陽に至る。魏の同軌防の長史の裴寬は東魏の將の彭樂等と戦い，樂の擒とする所と為り，澄は禮遇すること甚だ厚く，寬は間を得て逃げ歸る。（9-211p）澄は太行由り晉陽に返る。

■**〔陳霸先は南方で七軍諸軍事〕**屈獠洞（李賁が亂れるは159卷中大同元年にあり）は李賁を斬り，首を建康に傳える。賁の兄の天寶は遁げて九真に入り，餘兵二萬を収めて愛州（梁は九真郡に置く）を圍み，交州の司馬の陳霸先は衆を帥いて討ちて之を平らぐ。詔して霸先を以て西江督護、高要太守と為し、七郡諸軍事を督せしむ。

東魏夏，四月，甲子（60-58+1=3日），東魏の吏部令史の張永和等は偽りて人に官を假し，事覺われ，糾檢（官の糾檢してこれを發する所の者）、首者（自首する者）は六萬餘人。

東魏●**〔東魏は魏の潁川の王思政を攻める〕**甲戌（10+60-58+1=13日），東魏は太尉の高岳、行台の慕容紹宗、大都督の劉豐生等將歩騎十萬を遣わして魏の王思政（前卷前年に潁川を守る）を潁川に攻め使む。思政は命じて鼓を臥せ旗を偃せしめ，人無き者の若くす。岳は其の衆を恃み，四面より城を陵す。思政は驍勇を選びて開門して出で戦わしめ，岳の兵は敗走す。岳は更に土山を築き，晝夜之を攻め，思政は方に隨いて拒み守り，其の土山を奪い，樓堞を置き以て防守を助ける。

●**〔宇文泰の西境巡撫〕**五月，魏は丞相の泰を以て太師と為し，廣陵王の欣を太傅と為し，李弼を大宗伯と為し，趙貴を大司寇と為し，於謹を大司空と為す。太師の泰は太子を奉じて西境を巡撫し，隴に登り，原州に至り，北長城（秦の長城）を歴，東に五原に趣き，蒲州（五代志に、後魏は河東郡に秦州を置き、後周は改めて蒲

州という。蒲坂によりて名と為す。山西省河東道永濟県に治す、現・運城市永濟市）に至り、魏主の不豫を聞き而して還る。至るに及び、已に癒え、泰は華州に還る。

■ 【梁は東魏と修好】 上は建康令（梁の官制では秩千石）の謝挺、散騎常侍（秩二千石）の徐陵等を遣わして東魏に聘し、復た前好を修めしむ。陵は、摛（徐摛は155巻中大通三年）之子也。

東魏 六月、東魏の大將軍の澄は北邊を巡る。

■ 秋、七月、庚寅（26-26+1=1日）朔、日之を食する有り。

東魏 【東魏は淮南の地をすべて回収する】 乙卯（51-26+1=26日）、東魏の大將軍の澄は鄴に朝す。道士に偽濫多きを以て、始めて南郊の道壇（魏の太武帝は寇謙之を崇信し築く）を罷む。八月（七月閏月あり）、庚寅（26-25+1=2日）、澄は晉陽に還り、尚書の辛術を遣わして諸將を帥いて江、淮之北を略し、凡そ二十三州を獲る。（侯景が梁を乱し、明くる年東魏始めて盡く淮南の地を得る、史は其の終を究めてこれをいう）

【侯景を嘗めきる蕭衍】

■ 【帝は侯景の婚姻に反対】 侯景は壽陽に至りしより、徴求すること已む無く、朝廷は未だ嘗て拒絕せず。景は王、謝に娶らんと請い、上は曰く、

「王、謝は門高くして偶するに非ず、朱（朱異）、張（張綰）以下に於いて之を訪ねる可し。」

景は悲りて曰く、

「會ず將に吳の兒女を奴に配さん！」

又た啟して錦萬匹を求め、

「軍人の為に袍を作らん」

と。中領軍の朱異は議して青布を以て之に給す。又た台の給する所の仗は多く精なる能わずを以て、啟して東冶の鍛工を請い、更に營造せんと欲し、敕して並せて之を給す（続は欠如）。景は安北將軍の夏侯夔之子の譚を以て長史と為し、徐思玉を司馬と為し、（9-212p）譚は遂に「夏」を去りて「侯」と稱し、托して族子と為る。（夏侯詳は梁朝に佐命の功あり、子の宣・夔は皆力を邊陲に宣べ並びに声績を著す。譚に至りて負荷する能わず家声を墜とす）

■ 【帝は元貞の侯景から逃げるを輕視】 上は既に景の言を用いず、東魏と和親し、是の後景の表疏は稍稍悖慢なり。又た徐陵等の魏に使いするを聞き、反謀は益々甚だし。元貞（前卷前年にあり）は景の異志有るを知り、累りに啟して朝に還らんとする。景は謂って曰く、

「河北の事は果たさずと雖も、江南は何ぞ之を失うを慮らん、何ぞ小さく忍びざる！」

貞は懼れ、逃げて建康に歸り、具に事を以て聞す。上は貞を以て始興内史と為し、亦た景を問わず。

■ 【侯景は蕭正徳の不满に乗じる】 臨賀王の正徳（魏に奔りまた梁に還り、蕭衍は本封に復す）は、至る所貪暴不法にして、屢々罪を上に得、是に由りて憤恨し、陰に死士を養い、米を儲え貨を積み、國家の變有るを幸とする。景は之を知る。正徳は北に在りて徐思玉と相い知り、景は思玉を遣わし箋を正徳に致して曰わしむ、

「今天子の年は尊く、奸臣は國を亂す。景を以て之を觀るに、日を計りて禍敗せん。大王の屬は儲貳に當たり、中ごろ廢黜（149巻普通三年にあり）せらる、四海は業業として、心を大王に歸す。景は不敏なりと雖も、實に自ら效さんを思う。願わくは王允に蒼生に副い、斯の誠款を鑒みるべし！」

正徳は大いに喜びて曰く、

「侯公之意は、暗に吾と同じ、天は我に授くる也！」

之に報じて曰く、

「朝廷之事は、公の言う所の如し。僕之心有ることは、日為ること久し矣。今僕は其の内を為し、公が其の外を為せば、何ぞ濟らざる有らん！機事は速かに在り、今は其の時なり矣。」

■ 【鄱陽王范の通報を帝も朱異も無視】 鄱陽王の范は密に景の謀反を啟す。時に上は邊事を以て専ら朱異に委ね、動靜は皆な之に關し、異は以為らく必ず此の理無しとす。上は范に報じて曰く、

「景は孤危にして命を寄す、譬えば嬰兒が人の乳哺を仰ぐが如し、此の事勢を以て、安んぞ能く反せん乎！」

范は重ねて之を陳じて曰く、

「早く剪撲せざれば、禍は生民に及ばん。」

上は曰く、(直接言ったのではなく、報じたのみ)

「朝廷は自ら處分有り、汝は深く憂えるを須^{もち}いざる也。」

范は復た請う、

「自ら合肥之衆を以て之を討たん」

と、上は許さず。朱異は范の使いに謂って曰く、

「鄱陽王は遂に朝廷に一客有りを許さず！」

是より范の啟は、異は復た為に通ぜず。

■ 【侯景は唯一の客と輕視】 景は羊鴉仁(淮上に屯す)を邀えて同じく反せんとし、鴉仁は其の使いを執りて以て聞す。異は曰く、

「景は數百の叛虜なり、何ぞ能く為さん！」

敕して使者を以て建康の獄に付し、俄に解きて之を遣る。景は益々憚る所無く、上に啟して曰く、

「若し臣の事是れ實なれば、應に國憲に罹^{かか}るべし。如し照察を蒙れば、請う鴉仁を戮さん！」

景は又た上言す、

「高澄は狡猾なり、寧ぞ全く信ずる可けんや！陛下は其の詭語を納れ、與に連和せんと求む。臣は亦た竊に笑う所也。臣は寧ぞ粉骨して、命を仇門(高氏の東魏)に投ずるに堪えんや、乞う江西の一境、臣の控督を受けんことを。如し其の許さざれば、即ち甲騎を帥い、江上に臨み、閩、越に向かわん。唯だ朝廷自ら恥じるのみに非ず、亦た是れ三公吁食せん。」

上は朱異をして語を宣し景の使いに答え使めて曰く、

「譬えば貧家に、十客を畜う、五客は、尚ほ能く意を得る、朕は唯だ一客有り、忿言有るを致すが如し、亦た朕之失也。」(9-213p)

益々賞賜錦彩錢布を加え、信使は相い望む。

【侯景の亂ついに勃発、建康急襲】

■ 【侯景は朱異などを除くと挙兵】 戊戌(34-25+1=10日)、景は壽陽に反し、中領軍の朱異、少府卿の徐麟、太子の右衛率の陸驗、制局監(内の器仗兵役を監す)の周石珍を誅するを以て名と為す。異等は皆な奸佞驕貪にして、主を蔽い權を弄び、時人の疾む所為るを以て、故に景は托して以て兵を興す。麟、驗は、吳郡の人。石珍は、丹楊の人。麟、驗は迭に少府丞と為り、苛刻を以て務めと為し、百賈は之を怨み、異は尤も之と睚^なむ、世人は之を「三蠹(木食い虫)」と謂う。

■ 【帝は侯景討伐軍組織、懸賞金設定】 司農卿の傅岐は、鯁直の士也、嘗て異に謂って曰く、

「卿の任は國鈞に參し、榮寵は此くの如し。^{このころ}比日聞く所は、鄙穢狼藉なり、若し聖主をして發悟せ使めれば、免かれんと欲すを得ん乎！」

異は曰く、

「外間の謗讟^{ぼうとく}は、之を知ること久し矣。心は苟くも愧ずる無し、何ぞ人の言を恤えん！」

岐は人に謂って曰く、

「朱彦和^{（朱異の字）}は將に死せんとす矣。^{へつら}詔いを恃んで以て容れられんことを求め、辯を肆にして以て諫めを拒み、難を聞き而して懼れず、惡を知り而して改めず、天は其^{（続は之）}の鑒を奪い、其の能く久しき乎！」

景は西に馬頭（安徽省淮泗道懷遠縣東南、壽縣西北、現・蚌埠市懷遠縣）を攻め、其の將の宋子仙を遣わして東に木柵（刑山の西）を攻め、戍主の曹瑯等を執り、上は之を聞き、笑いて曰く、

「是れ何ぞ能く為さん！吾は折槿（折れ鞭）をもて之を答たん。」

敕して景を斬る者を購ひ、三千戸公に封じ、州刺史に除せんと。甲辰（40-25+1=16日）、詔して合州刺史の鄱陽王の范を以て南道都督と為し、北徐州刺史の封山侯の正表を北道都督と為し、司州刺史の柳仲禮を西道都督と為し、通直散騎常侍の裴之高を東道都督と為し、侍中、開府儀同三司の邵陵王の綸を以て節を持して衆軍を董督し以て景を討たしむ。正表は、宏（帝の弟、正徳兄弟は皆その子）之子。仲禮は、慶遠（天監の名臣）之孫。之高は、邃（天監の名臣）之兄の子也。

東魏九月、東魏の濮陽武公の婁昭は卒す。

■ **[侯景は王偉の策で建康を急襲]** 侯景は台軍の之を討つを聞き、策を王偉に問う。偉は曰く、

「邵陵が若し至れば、彼は衆、我は寡なり、必ず困しむ所と為る。淮南（壽陽は古の淮南治所）を棄て、志を決して東に向かい、輕騎を帥いて直ちに建康を掩わんに如かず。臨賀は其の内に反し、大王は其の外を攻め、天下は定むに足らざらん也。兵は拙速を貴ぶ、宜しく即ち路を進むべし。」

景は乃ち外弟の中軍大都督の王顯貴を止めて壽陽を守らしむ。癸未（19+60-55+1=25日）、詐て遊獵と稱し、壽陽を出で、人は之を覺らず。冬、十月、庚寅（26-24+1=3日）、景は合肥に趣くと揚聲し、而して實は譙州を襲い、助防の董紹先は開城して之に降る。刺史の豐城侯の泰を執る。泰は、范之弟也、先に中書舍人と為り、財を傾けて以て時要に事え、譙州（渦陽の譙州に非ず。梁は譙州を新昌城に置き、高塘・臨徐・南梁・新昌郡を領す。安徽省淮泗道滁縣、現・滁州市南譙區）刺史を超授される。州に至り、^{あまね}遍く民丁を發し、腰輿（人が挙げて行く、高さ腰より上）、扇、繖（蓋）等の物を擔^{にな}わ使め、士庶に限らず。之を為すを恥じる者は、重く杖責を加え、多く財を輸^{おく}る者は、即ち縦ちて之を免じ、是に由りて人は皆な亂を思う。侯景の至るに及び、人は戰心無く、故に敗れる。

■ **[侯景を歷陽を落し、建康に急行]** 庚子（36-24+1=13日）、（9-214p）詔して寧遠將軍の王質を遣わして衆三千を帥いて江を巡り防遏せしむ。景は歷陽太守の莊鐵を攻め、丁未（43-24+1=20日）、鐵は城を以て降り、因りて景を説いて曰く、

「國家の承平なること歳久しく、人は戰いを習わず、大王の舉兵を聞き、内外は震駭す。宜しく此の際に乘じ速かに建康に趣くべし、兵は刃に血あらず而して大功を成す可からん。若し朝廷をして徐^{おもむろ}に備えを為すを得使め、内外は小安し、羸兵千人を遣わし直ちに採石に據らしめば、大王は精甲百萬有りと雖も、濟るを得ざらん矣。」

景は乃ち儀同三司の田英、郭駱を留めて歷陽を守らしめ、鐵を以て導と為し、兵を引いて江に臨む。江上の鎮戍は相い次ぎて啟聞す。

■ 「蕭衍は羊侃に侯景打倒策を問う」 上は景を討つ之策を都官尚書の羊侃に問い、侃は請う、

「二千人を以て急に採石に據り、邵陵王をして襲いて壽陽を取ら令むべし。景をして進みて前むを得ざら使め、退きては巢穴を失わしめば、烏合之衆は、自然に瓦解せん。」

朱異は曰く、

「景は必ず江を渡る之志無し。」

遂に其の議は寝ねる。侃は曰く、

「今茲に敗れん矣！」

■ 「正徳は侯景を手引き」 戊申（44-24+1=2 1 日）、臨賀王の正徳を以て平北將軍、都督京師諸軍事と為し、丹楊郡（治所は江渚に近し）に屯せしむ。正徳は大船數十艘を遣わし、詐りて荻を載せると稱し、密に以て景を濟す。景は將に濟らんとし、王質が梗（芯の硬い枝、梗塞）を為さんと慮り、謀をして之を視しむ。會々臨川太守の陳昕は啟して稱す、

「採石は急なり、^{すべから}須く重鎮すべし、王質の水軍は輕弱なり、恐らくは（国事を）濟す能わざらん。」

上は昕を以て雲旗將軍と為し、質に代わりて採石に戍せしめ、質を征して丹楊尹の事を知たらしむ。昕は、慶之（洛陽に入るの功臣）之子也。質は採石を去り、而して昕は猶ほ未だ渚（秦淮渚）に下らず。謀は景に告げて云わく、

「質は已に退く。」

景は江東の樹枝を折りて驗と為さ使む、謀は言の如く而して返る、景は大いに喜びて曰く、

「吾が事は辦ぜり矣！」

己酉（45-24+1=2 2 日）、横江より採石に濟り、馬數百匹、兵八千人有り。是の夕、朝廷は始めて戒嚴を命ず。

■ 「未だ正徳の侯景に通じるを知らず」 景は兵を分けて姑孰（晉の成帝の始め、淮南郡を僞立）を襲い、淮南太守の文成侯の寧を執る。南津校尉の江子一は舟師千餘人を帥い、下流に於いて景を邀えんと欲す。其の副の董桃生は、家は江北に在り、其の徒と與に先ず潰走す。子一は餘衆を收めて、歩みて建康に還る。子一は、子四之兄也。太子は事の急なるを見、戎服して入りて上に見え、方略を稟受し、上は曰く、

「此れ自ら汝の事なり、何び更に問うを為さん！内外の軍は悉く以て汝に付す。」

太子は乃ち中書省に停まり、軍事を指授し、物情は惶駭し、募りに應ずる者有るは莫し。朝廷は猶ほ臨賀王の正徳之情を知らず、正徳に命じて朱雀門に屯せしめ、寧國公の大臨（太子の子）をして新亭に屯せしめ、太府卿の韋黯をして六門に屯せしめ、宮城を繕修し、敵を受ける之備えを為す。大臨は、大器（太子の子）之弟也。

■ 「侯景は迫り、建康守備体制」 己酉（45-24+1=2 2 日）、景は慈湖に至る。建康は大いに駭き、御街の人は更に相い劫掠し、復た通行せず。東、西の冶、尚方錢署及び建康の系囚を赦し、揚州刺史の宣城王の大器を以て城内諸軍事を都督せしめ、羊侃を以て軍師將軍と為し之に副とし、南浦（劉禪の建興八年に南浦県を立て巴東郡に属す）侯の推をして東府を守らしめ、西豐（呉は豐県を立て、臨川郡に属す、晉の武帝太康元年に更めて西豐とす）公の大春をして石頭を守らしめ、(9-215p) 輕車長史の謝禧、始興太守の元貞をして白下を守らしめ、韋黯は右衛將軍の柳津等と分けて宮城の諸門及び朝堂を守らしむ。推は、秀（安成王秀は帝の弟）之子。大春は、大臨之弟。津は、仲禮之父也。諸寺庫の公藏錢を^{おさ}擔め、之を德陽堂（天監六年に閔武堂を改める。南闕の前に在り）に聚め、以て軍實に充てる。

■ 「徐思玉の偵察、侯景の悪言」 庚戌（46-24+1=2 3 日）、侯景は板橋（秦淮河の西南）に至り、徐思玉を遣

わして來たりて上に見えんことを求め、實に城中の虚實を觀んと欲する。上は召して之を問う。思玉は詐りて、

「景に叛く」

と稱し間を請いて事を陳じ、上は將に左右を屏げんとし、舍人の高善寶は曰く、

「思玉は賊中より來たり、情偽は測り難し、安んぞ獨り殿上に在ら使む可けんや！」

朱異は侍坐し、曰く、

「徐思玉は豈に刺客ならん邪！」

思玉は景の啟を出して、言う、

「異等は權を弄す、乞う甲を帶して入朝し、君側之惡を除かん。」

異は甚だ慚悚（さんしよく 恥じ恐れる）す。景は又た了事（猶ほ事を曉るというが如し、事情に通じる）舍人を遣わして出でて相い領解（景が言わんと欲する所を總録して、是非を分判せしむるを言う。凡そ此皆侯景の詭言にして、以て梁朝の君臣を怠らしめ、戰意を無からしめんとす）せしめんと請い、上は中書舍人の賀季、主書の郭寶亮を遣わして、思玉に隨い景を板橋に勞わらしむむ。景は北面して敕を受け、季は曰く、

「今者之舉は何の名（名目）ぞや？」

景は曰く、

「帝と為らんと欲す也！」

王偉は進みて曰く、

「朱異等は政を亂す、奸臣を除く耳。」

景は既に惡言（帝と為るの言）を出だし、遂に季を留め、獨り寶亮を遣りて宮に還らしむ。

【建康攻防戦】

■ 【建康城内の混乱、羊侃指揮】 百姓は景が至ると聞き、競いて城に入り、公私は混亂し、復た次第無し。羊侃は區分して防擬し、皆な宗室を以て之に間える。軍人は争いて武庫に入り、自ら器甲を取り、所司（武庫令の屬）は禁じる能わず、侃は命じて數人を斬らしめ、方めて止む。是の時、梁は興りて四十七年、境内は無事にして、公卿の在位及び閭裡の士大夫は兵甲を見ること罕なり、賊は至り猝かに迫り、公私は駭震す。宿將は已に盡き、後進の少年は並び出でて外に在り、軍旅の指手は一に侃の決すると為す、侃は膽力俱に壯なり、太子は深く之に仗る。

■ 【庾信逃亡と臨賀王正徳の内応】 辛亥（），景は朱雀桁の南（秦淮河の南岸）に至り、太子は臨賀王の正徳を以て宣陽門を守らしめ、東宮學士の新野の庾信に朱雀門を守らしめ、宮中の文武三千餘人を帥いて桁の北に營す。太子は信に命じて大桁を開かしめ以て其の鋒を挫かんとし、正徳は曰く、

「百姓は桁を開くを見れば、必ず大いに驚駭せん。且く物情を安んずべし。」

太子は之に従う。俄に而して景は至り、信は衆を帥いて桁を開き、始めて一舶を除く。景の軍を見るに皆な鐵面を著け、退きて門に隠れる。信は方に甘蔗（サトウキビ）を食す、飛箭有り門柱に中たり、信の手の甘蔗は、弦に應じ而して落ち、遂に軍を棄てて走る。南塘の遊軍の沈子睦は、臨賀王の正徳之黨也、（庾信が逃げて北岸が空白となり）復た桁を閉じて景を渡す。太子は王質をして精兵三千を將いて信を援け使め、領軍府に至り、賊に遇い、未だ陳せず而して走る。正徳は衆を帥い張侯橋に於いて景を迎え、馬上に交々揖し、既に宣陽門に入り、（9-216p）闕を望み而して拜し、獻欵流涕し、景に隨いて淮を渡る。景の軍は皆な青袍を著、正徳の軍は並びに絳袍、碧裡を著け、既に景と合し、悉く其の袍を反す。景は勝ちに乗りて闕下

に至り、城中は恐懼し、羊侃は詐りて射書を得たりと稱して云わく、

「邵陵王（綸の兵は既に鐘離に向かう）、西昌侯（京口に鎮す）の援兵は已に近路に至る。」

衆は乃ち少しく安ず。西豊公の大春は石頭を棄て、京口に奔る。謝禧、元貞は白下を棄てて走る。津主の彭文榮等は石頭城を以て景に降り、景は其の儀同三司の於子悦を遣わして之を守らしむ。

■ 〔朱異誅殺を太子助言で拒否〕 壬子（48-24+1=25日）、景は兵を列して台城を繞る。幡旗（続は旗幟）皆な黒く、啟を城中に射て曰く、

「朱異等は朝權を蔑弄し、輕々しく威福を作し、臣はおとし陷れられる所と為り、屠戮を加えんと欲せらる。陛下は若し朱異等を誅すれば、臣は則ち轡を斂めて北に歸らん。」

上は太子に問い、

「是れ有る乎？」

對えて曰く、

「然り。」

上は將に之を誅さんとす。太子は曰く、

「賊は異等を以て名と為す耳。今日之を殺せば、急を救う無し、適々笑いを將來に貽すに足らん、賊の平らぐを俟ちて、之を誅するも未だ晩からず。」

上は乃ち止む。

■ 〔攻城器械と羊侃の防戦〕 景は城を繞ること既にあまね匝く、百道は俱に攻め、鳴鼓、吹脣、喧聲は地を震わし、火を縦ちて大司馬、東、西華の諸門を焼く。羊侃は門上を鑿りて竅を為り、水を下して火に沃が使む。太子は自ら銀鞍を捧げ、往きて戰士を賞す。直閣將軍の朱思は戰士數人を帥いて城を逾えて外に出でて水をそそ灑ぎ、之久しくして方めて滅す。賊は又た長柯斧（長い柄の斧）を以て東掖門を斫り、門は將に開かんとし、羊侃は扇（門扉）を鑿りて孔と為し、槊を以て二人を刺殺す、斫る者は乃ち退く。景は公車府（梁の制では公車令は衛尉に屬し、署舎は台城の門外に在り）に據り、正徳は左衛府に據り、景の黨の宋子仙は東宮に據り、范桃棒は同泰寺に據る。景は東宮の妓（女樂）數百を取り、分けて軍士に給す。東宮は城（台城）に近く、景の衆は其の牆に登りて城内を射る。夜に至り、景は東宮に於いて酒を置き樂を奏し、太子は人を遣わして之を焚き、台殿及び聚める所の圖書は皆な盡く。景は又た乘黃殿、士林館（大同中に台城の西に立て、朱異・顧琛・孔子袿をして互いに講述せしむ）、太府寺を焼く。癸丑（49-24+1=26日）、景は木驢（木で背を作り長さ一丈径一尺五寸、下に六脚を置き下潤まして上尖り、高さ七尺、内に六人を容れ、湿牛皮を以て之を蔽い、人は其の下に蔽われ、昇きて直に城下に抵る、木石鐵火敗る能わざる所、用いて以て城を攻める）數百を作りて城を攻め、城上は投石して之を碎く。景は更に尖項木驢を作る、石は破る能わず。羊侃は雉尾炬（葦草を縛してこれを為り。鐵鏃を施し、脂を以てこれに濯ぎ、驢上に擲ってこれを焚く）を作ら使め、灌ぐに膏蠟を以てし、むら叢がりなげう擲ちて之を焚く、にわか俄に盡く。景は又た登城樓を作り、高さは十餘丈なり、臨みて城中を射んと欲す。侃は曰く、

「車は高く塹は虚し、彼來たれば必ず倒れ、臥し而して之を觀る可し。」

及ち車は動き、果たして倒る。

■ 〔攻城戦膠着〕 景は攻めて既に克たず、士卒の死傷は多く、乃ち長圍を築いて以て内外を絶ち、又た啟して朱異等を誅するを求む。城中も亦た賞格を射て外に出して曰く、

「能く景の首を送る者有れば、授けるに景の位を以てし、並せて錢一億萬、布絹各々萬匹。」

朱異、張綰は出兵して之を撃たんと議し、上は羊侃に問い、（9-217p）侃は曰く、

「可からず。今人を出すに、若し少なければ、賊を破るに足らず、徒らに銳氣を挫かん。若し多ければ、

則ち一旦利を失えば、門は隘^{せま}く橋小に、必ず大いに失亡を致さん。」

異等は従わず、千餘人をして出で戦わしめ。鋒は未だ交わるに及ばず、退き走り、争橋を致し水に赴きて死する者は大半なり。

■ 【侯景は羊侃の忠義を以て子を殺さず】 侃の子の鸞は、景の獲る所と為り、執えて城下に至り、以て侃に示し、侃は曰く、

「我は宗を傾けて主に報ず、猶ほ足らざるを恨む、豈に一子を計らんや、幸に早く之を殺せ！」

數日にして、復た持して來たる、侃は鸞に謂って曰く、

「久しく汝を以て死せりと為す矣、猶ほ在り邪！」

弓を引きて之を射る。景は其の忠義を以て、亦た之を殺さず。

■ 莊鐵は景が克たざるを慮り、托して母を迎えんと稱し、左右數十人と歷陽に趣く。先ず書を遣わして田英、郭駱を給いて曰く、

「侯王は已に台軍の殺す所と為り、國家は我をして鎮に歸らしむ。」

駱等は大いに懼れ、城を棄てて壽陽に奔り、鐵は城に入り、敢えて守らず、其の母を奉じて尋陽に奔る。

【兩軍奮闘、戦線膠着】

■ 十一月、戊午（54-54+1=1日）朔、白馬刑し、蚩尤^{しゅう}（古の天子は五兵を好む、故にこれを祭り、福祥を求める）を太極殿の前に祀る。

■ 【正徳即位、侯景は丞相】 臨賀王の正徳は儀賢堂（天監六年に聴訟堂を改める、南闕の前に在り）に於いて帝位に即き、下詔して稱す、

「普通已來、奸邪は政を亂し、上は久しく不豫にして、社稷は將に危からんとす。河南王の景は、位を釋てて來朝し、猥りに朕が躬を用い、茲の寶位を紹ぐ、大赦す可し」

と、改元して正平とす。其の世子の見理を立てて皇太子と為し、景を以て丞相と為し、妻^{めあわ}すに女を以てし、並びに家之寶貨を出し悉く軍費を助ける。是に於いて景は闕前に營し、其の兵二千人を分けて東府を攻める。南浦侯の推は之を拒むこと、三日、克たず。景は自ら往きて之を攻め、矢石は雨のごとく下り、宣城王（大器、太子の長子）の防閤の許伯衆（東府にあり、内応可能）は潜に景の衆を引き登城す。辛酉（57-54+1=4日）、之に克つ。南浦侯の推及び城中の戰士三千人を殺し、其の屍を載せて杜姥宅に聚まり、遙に城中の人に語りて曰く、

「若し早く降らざれば、正に當に此くの如し！」

■ 【上晏駕の噂を帝は巡回して消す】 景は聲言す、

「上は已に晏駕す」

と、城中と雖も亦た以て然りと為す。壬戌（58-54+1=5日）、太子は上に城を巡らんと請い、上は大司馬門に幸し、城上は蹕の聲を聞き、皆な鼓噪して流涕し、衆心は粗ぼ安ず。

■ 【江子一の奮闘戦死】 江子一之敗れ還る（采石よりの敗北）也、上は之を責める。子一は拜謝して曰く、

「臣は身を以て國に許す、常に其の死を得ざるを恐る。今部する所は皆な臣を棄てて去り、臣は一夫を以て安んぞ能く賊を撃たんや！若し賊が遂に能く此に至れば、臣は誓いて當に碎身し以て前罪を贖わん、闕の前に死せざれば、當に闕後に死すべし。」

乙亥（1+60-54+1=8日）、子一は太子に啟し、弟の尚書左丞の子四、東宮主帥の子五と所領百餘人を帥いて承明門を開いて出で戦う。子一は直ちに賊營に抵り、賊の伏兵は（未だ情勢把握せずして）動かず。子一は呼

びて曰く、

「賊の輩は何ぞ速かに出でざるや！」

之久しく、賊騎は出で、夾みて之を攻める。子一は徑^{ただ}ちに前み、槊を引いて賊を刺す。従者は敢えて繼ぐ莫し、賊は其の肩を解き而して死す。子四、子五は相い謂って曰く、

「兄と俱に出で、何の面ありてか獨り旋らん！」(9-218P)

皆な胛を免いで賊に赴く。子四は槊が中たり、胸を洞^{つらぬ}かれ而して死す。子五は脰^{うなじ}に傷き、還りて塹に至り、一働し而して絶える。(胡三省曰く、江子一兄弟は肩を並べて以て剛下に死す、而れども以て社稷を守るに足らず、悲しいかな。古人が千里の外に折衝するを重んじる所以の者なりと)

■ 「侯景は食尽き乱暴狼藉す」 景は初め建康に至るや、朝夕に抜く可しと謂い、號令は嚴整なり、士卒は敢えて侵暴せず。屢々攻めて克たざるに及び、人心は離沮し。景は援兵の四集し、一旦潰え去らんと恐れる。又た石頭常平の諸倉を食し既に盡く、軍中は食乏し。乃ち士卒を縦ちて民の米及び金帛子女を掠奪す。是の後に米一升は七八萬錢に直(続は至)し、人は相い食み、餓死者は什に五六となる。

■ 「双方土山築く戦い」 乙丑(1+60-54+1=8日)、景は城の東西に土山を起し、士民を驅迫し、貴賤に限らず、亂りに毆捶を加え、疲羸する者は因りて殺して以て山を填め、號哭は地を動かす。民は敢えて竄匿せず、並びに出でて之に従う、旬日間、衆は數萬に至る。城中も亦た土山を築きて以て之に應じる。太子、宣城王已下、皆な親ら土を負い、畚鍤^{ほんそう}(もっこ・鋤)を執り、山上に於いて芙蓉層樓(下に棉栢を施し、層層疊出し芙蓉花の如し)を起し、高さは四丈、飾るに錦罽(錦毛布)を以てす、敢死の士二千人を募り、厚衣袍鎧し、之を「僧騰客」と謂い、二山に分配し、晝夜交戦して息まず。會々大雨ふり、城内の土山は崩れる。賊は之に乗り、入るに垂々とし、苦戦して禁ずる能わず。羊侃は令して多く火を擲ちて、火城を為り以て其の路を斷ち、徐ろに内に於いて城を築き、賊は進む能わず。

■ 「侯景は朱異の奴を懷柔」 景は人奴の降る者を募り、悉く免じて良(良民)と為す。朱異の奴を得、以て儀同三司と為し、異家の資産は悉く之を與える。奴は良馬に乗り、錦袍を衣、城下に於いて仰ぎて異をはずかし話めて曰く、

「汝は五十年仕宦し、方めて中領軍を得たり。我は始めて侯王に事え、已に儀同と為る矣！」

是に於いて三日之中に、群奴出でて景に就く者は千を以て數え、景は皆な厚く撫し以て配軍(続は配實)し、人人は恩に感じ、之が為に死を致す。

■ 「蕭繹らは援軍組織」 荊州刺史の湘東王の繹は景が台城を圍むを聞き、丙寅(2+60-54+1=9日)、戒嚴し、檄を督する所の湘州刺史の河東王の譽、雍州刺史の岳陽王の察、江州刺史の當陽公の大心、郢州刺史の南平王の恪等に移し、兵を發して援に入る。大心は、大器之弟。恪は、偉之子也。

■ 「朱異と侯景のやり取り」 朱異は景に書を遣り、為に禍福を陳ずる。景は報書し、並せて城中の士民に告げ、以為く、

「梁は近歳より以來、權幸は事を用い、齊民を割剝し、以て嗜欲に供す。如し然らずと曰えば、公等は試みに觀よ。今日國家の池苑、王公の第宅、僧尼の寺塔、及び在位の庶僚、姬姜の百室、僕従の數千、耕さず織らず、錦衣玉食す。百姓より奪わざれば、何くより之を得るや！僕が闕庭に趨赴する所以は、權佞を指誅す、社稷を傾けるに非ず。今城中は四方の入援を指望す、吾が王侯、諸將を觀るに、志は身を全くすに在り、誰か能く力を竭し死を致し、吾と勝負を爭わん哉！長江の天險(魏の文帝紀にあり)は、二曹の歎ずる所なり、吾は一葦(詩の國風に曰く、誰か謂う河廣しと、一葦これを杭と。杭は渡るなり。葦を小舟にたとえる)にて之をわた航り、日明らかに氣淨す。天人允協するに非ざるよりは、(9-219p) 何ぞ能く是くの如くならん！幸いに

も各々三思し、自ら元吉を求めるべし！」

■**東魏**「**侯景は東魏主に家族引き渡しを願う**」**景**は又た啟を**東魏主**に奉じ、稱す、

「臣は進みて壽春を取り、暫く停憩せんと欲す。而るに**蕭衍**は此の運の終わりを識り、自ら寶位を辭す。臣の軍は未だ其の國に入らざるに、已に同泰に投じて捨身す。去る月二十九日、此の建康に届く。江海は未だ蘇せず、干戈は暫く止み、永く言に故郷、人馬は同じく戀う。尋いで當に響を整え、以て聖顔を奉ずべし。臣之母、弟は、久しく屠滅すると謂う、近ごろ明敕を奉じ、始めて猶ほ在るを承る。斯れ乃ち陛下の寛仁、大將軍の恩念なり、臣之弱劣は、知んぬ何ぞ仰ぎ報ぜん！今輒ち啟を繼ぎ臣之母、弟、妻、兒を迎えん、伏して願わくは聖慈、特に裁放を賜わらん！」

■己巳（5+60-54+1= 1 2 日）、湘東王の**繹**は司馬の**吳曄**、天門太守の**樊文皎**等を遣わして兵を將いて江陵を發せしむ。

■「**陳昕は侯景に捕虜、様々な駆け引き**」**陳昕**は**景**の擒える所と為り、**景**は之と極飲し、**昕**をして部曲を收集せしめ、之を用いんと欲す。**昕**は可からず、**景**は其の儀同三司の**范桃棒**をして之を囚えしむ。**昕**は因りて**桃棒**を説き、所部を帥いて襲いて**王偉**、**宋子仙**を殺し、城に詣りて降らしむ。**桃棒**は之に従い、潜に**昕**を遣わして夜繼して城に入らしむ。上は大いに喜び、敕して銀券を鑄（彫刻）し**桃棒**に賜いて曰く、「事定まる之日、汝を河南王に封じ、即ち**景**の衆を有し、並せて金帛女樂を給わん。」

太子は其の詐わりを恐れ、猶豫して決せず、上は怒りて曰く、

「降りを受けるは常の理なり、何ぞ忽ち疑いを致さん！」

太子は公卿を召して會議し、**朱異**、**傅岐**は曰く、

「**桃棒**は降るは必ず謬りに非ず。**桃棒**は既に降り、**景**の賊は必ず驚かん、此に乗りて之を撃てば、大いに破る可き也。」

太子は曰く、

「吾は城を堅くして自ら守り以て外援を俟つ、援兵が既に至れば、賊は豈に平らぐるに足りん！此れ萬全の策也。今開門して**桃棒**を納れば、**桃棒**之情は、何ぞ知る可きこと易からんや！萬一變を為せば、悔いるとも及ぶ所無し。社稷の事は重し、須く更に之を詳かにすべし。」

異は曰く、

「殿下が若し社稷之急を以てせば、宜しく**桃棒**を納れるべし。如し其の猶豫すれば、**異**が知る所に非ず。」

太子は終に決する能わず。**桃棒**も又た**昕**をして啟して曰わしむ、

「今は止だ所領五百人を將いて、若し城門に至れば、皆な自ら甲を脱がん、乞う朝廷は開門して容るるを賜わらん。事済之後、保して**侯景**を擒とせん。」

太子は其の懇切を見、愈々之を疑う。（太子は疑うべきを疑わず、べからずを疑う）**朱異**は膺を拊して曰く、

「此を失えば、社稷の事は去らん矣！」

俄に而して**桃棒**は部下の告げる所と為り、**景**は之を拉殺（くじき殺す）す。**陳昕**は知らず、期の如く而して出で、**景**は邀えて之を得、逼りて書を城中に射て曰わしむ、

「**桃棒**は且く軽く數十人を將いて先ず入るべし。」

景は衷甲して之に随わんと欲し、**昕**は肯ぜず、期するに必死を以てし、乃ち之を殺す。

■「**蕭見理は死す**」**景**は**蕭見理**をして儀同三司の**盧暉略**と東府に戍せしむ。**見理**は凶險にして、夜、群盜と大桁に剽劫し、流矢に中たり而して死す。

【東西救援軍の到着と合戦】

■ 【蕭綸の救援軍は京口より西上】 邵陵王の綸は行きて鐘離に至り、侯景の已に採石を渡るを聞き、綸は晝夜兼道し、軍を旋して入援し、江を濟り、中流にして風起こり、(9-220p) 人馬の溺れる者は什に一二なり。遂に寧遠將軍の西豐(臨川郡の県、吳立つ) 公の大春、新淦(漢に豫章郡に属す) 公の大成、永安(吳は烏程・餘杭を分けて永安県を立て、晉は武康と為す) 侯の確、安南(晉の武帝は江安を分けて安南県を立つ) 侯の駿、前譙州刺史の趙伯超、武州(武陵郡に梁は武州を置く) 刺史の蕭弄璋等を帥い、歩騎三萬、京口より西上す。大成は、大春之弟。確は、綸之子。駿は、懿之孫也。

■ 【蕭綸は侯景に覆舟山で敗れ壊乱】 景は軍を遣わして江乘に至り綸の軍を拒ましむ。趙伯超は曰く、「若し黃城の大路よりいけば、必ず賊と遇わん、徑ちに鐘山(蔣山、吳の孫權は蔣子文の廟を立てる。亦その祖の諱鐘なるを以て蔣山と改める。、江蘇省金陵道江寧県の東北、建康の東北) を指し、廣莫門に突據す。賊の不意に出るに如かず、城の圍みは必ず解けん矣。」

綸は之に従い、夜行きて道を失い、二十餘里を迂る。庚辰(16+60-54+1=23日)の旦は、蔣山に營ず。景は之を見て大いに駭き、悉く掠する所の婦女、珍貨を石頭に送り、舟を具して走らんと欲す。兵を分けて三道より綸を攻め、綸は與に戦いて、之を破る。時に山巔は寒くして雪あり、乃ち軍を引きて愛敬寺(帝は文皇帝・獻皇后に事えて孝なり。鐘山に於いて大愛敬寺を造り以て福に資す) に下る。景は兵を覆舟山の北に陳ね、乙酉(21+60-54+1=28日)、綸は進みて玄武湖の側に軍し、景と對陳し、戦わず。暮に至り、景は更に明日を約して會戦せんとし、綸は之を許す。安南侯の駿は景の軍の退くを見、以て走ると為し、即ち壯士と之を逐う。景は軍を旋して之を撃ち、駿は敗走し、綸の軍に趣く。趙伯超は望見し、亦た兵を引いて走り、景は勝ちに乗りて之を追撃し、諸軍は皆な潰える。綸は餘兵を収め、千人に近く、天保寺に入る。景は之を追ひ、火を縦ちて寺を焼く。綸は朱方(丹徒は春秋時代の朱方の地。時に蘭陵武進県。江蘇省金陵道丹徒県、現・鎮江市丹徒区) に奔り、士卒は冰雪を踐み、往往にして足を墮とす。景は悉く綸の輜重を収め、西豐公の大春、安前司馬(帝の置く240將に安前將軍ありその司馬) の莊丘慧、主帥の霍俊等を生きて擒とし而して還る。丙戌(22+60-54+1=29日)、景は獲る所の綸の軍の首虜鎧仗及び大春等を城下に陳ね、言つて曰わ使む「邵陵王は已に亂兵の殺す所と為る。」

霍俊は獨り曰く、

「王は小しく利を失い、已に全軍を全くして京口に還る。城中は但だ堅守すべし、援軍は尋ぎて至る。」賊は刀を以て其の背を殴ち、俊は辭色彌々厲し。景は義とし而して之を釋し、臨賀王の正徳は之を殺す。

■ 【蕭范の入援、正表の二心】 是の日の晩、鄱陽王の范は其の世子の嗣を遣わし西豫州刺史の裴之高、建安太守の趙鳳舉と各々兵を將いて入援し、蔡洲に軍し、以て上流の諸軍を待ち、范は之高を以て江右援軍事を督さしむ。景は悉く南岸の居民を水北に驅り、其の廬舎を焚き、大街より已西は、地を掃いて俱に盡く。北徐州刺史の封山侯の正表は鐘離に鎮し、上は之を召して入援せしめ、正表は托するに船糧未だ集まらざるを以てし、進まず。景は正表を以て南兗州刺史と為し、南郡王に封ず。正表は乃ち歐陽(江蘇省淮陽道儀徵県東北、現・揚州市儀徵市) に於いて柵を立て以て援軍を斷ち、衆一萬を帥い、入援すると聲言す、實は廣陵を襲わんと欲す。密書して廣陵令の劉詢を誘い、城を燒き應を為さん使めんとす。詢は以て南兗州刺史の南康王の會理に告げる。十二月、會理は詢をして歩騎(9-221p)千人を帥いて夜正表を襲わ使め、大いに之を破る。正表は走りて鐘離に還る。詢は其の兵糧を収め、歸りて會理に就き、之と入援す。

■ 【羊侃の死】 癸巳(29-23+1=7日)、侍中、都官尚書の羊侃は卒し、城中は益々懼れる。侯景は大いに攻具を造り、闕前に陳じ、大車は高さ數丈、一車に二十輪あり。丁酉(33-23+1=11日)、復た進みて城

を攻め、蝦蟆車を以て土を運びて塹を填^{うず}む。

■ 〔蕭方等の東下〕 湘東王の繹は世子の方等を遣わして歩騎一萬を將いて建康に入援せしめ、庚子（36-23+1=14日）、公安を發す。繹は又た竟陵太守の王僧辯を遣わして舟師萬人を將い、漢川（漢水は竟陵郡を巡り江の入る）より出でて、糧を載せて東に下る。方等は俊才有り、善く騎射し、戦う毎に、親ら矢石を犯し、節に死するを以て自任す。

■ 〔侯景の火攻め〕 壬寅（38-23+1=16日）、侯景は火車を以て台城の東南樓を焚く。材官の吳景は巧思有り、城内に於いて地を構えて樓を為り、火才かに滅すれば、新樓は即ち立ち、賊は以て神と為す。景（侯景）は火起こるに因り、潜に人を遣わして其の下に城を穿たしむ。城は將に崩れんとし、乃ち之を覺る。吳景は城内に於いて更に迂城（曲がりたる城）を築き、狀は卻月の如く以て之に擬し、兼ねて火を擲ち、其の攻具を焚き、賊は乃ち退き走る。太子は洗馬の元孟恭を遣わして千人を將いて大司馬門より出で蕩せしめ、孟恭は左右と奔りて景に降る。

■ 〔土山放棄、水攻め〕 己酉（45-23+1=23日）、景の土山は少々城樓に逼り、柳津は命じて地道を作らしめ以て其の土を取り、外山は崩れ、賊を壓し且に盡きんとす。又た城内に於いて飛橋を作り、二土山上に懸罩（釣り覆う）す。景の衆は飛橋の過^{はる}かに出でるを見、崩騰し而して走る。城内は雉尾炬を擲ち、其の東山を焚き、樓柵は蕩盡し、賊は積りて城下に死す、乃ち土山を棄て復た修めず、自ら其の攻具を焚く。材官將軍の宋嶷は景に降り、之に教えるに玄武湖の水を引いて以て台城に灌がしむ、闕前は皆な洪流と為る。

■ 〔韋粲の援軍〕 上は衡州（五代志に梁は南海郡に置く、現・湖南省衡陽市）刺史の韋粲を征して散騎常侍と為し、都督の長沙の歐陽頔を以て州事を監せしむ。粲は、放（151卷大通元年にあり）之子也。還りて、廬陵に至り、侯景の亂を聞き、粲は部下を簡閲し、精兵五千を得、倍道して援に赴く。豫章に至り、景が已に横江に出るを聞き、粲は内史の劉孝儀に就きて之を謀り、孝儀は曰く、

「必ず此くの如くならば、當に敕有るべし。豈に輕々しく人の言を信じて、妄りに相い驚動す可けんや！或は恐らくは然らず。」

時に孝儀は置酒し、粲は怒り、杯を以て地に抵^{なげう}ちて曰く、

「賊は已に江を渡り、便ち宮闕に逼り、水陸は俱に斷ち、何の報有るに暇あらん！假令敕無くとも、豈に自ら安んずるを得んや！韋粲は今日何の情ありてか飲酒せんや！」

即ち馬を馳せて出で、部分して將に發せんとし、會々江州刺史の當陽公の天心は遣使して粲を邀え、粲は乃ち馳せて往き天心を見て曰く、

「上游（上流）の籓鎮は、江州は京を去ること最も近く（1400里）、殿下の情計は誠に宜しく前に在るべし。但だ中流の任は重く、當に須く應接すべし、鎮を闕く可からず。今宜しく且く聲勢を張り、移りて湓城に鎮ずべし、偏將を遣わし隨うことを賜われば、事に於いて便ち足らん。」

天心は之を然りとし、中兵の柳昕を遣わして兵二千人を帥いて粲に隨わしめ、粲は南洲に至り、外弟の司州刺史の柳仲禮も亦た歩騎萬餘人を帥いて横江に至り、（9-222p）粲は即ち糧仗を送りて之に贍給し、並せて私の金帛を散じ以て其の戰士に賞す。

■ 〔韋粲は裴之高を説得して、柳仲禮を大都督とす〕 西豫州刺史の裴之高は張公洲（蔡洲）より船を遣わして仲禮を度し、丙辰（52-23+1=30日）夜、粲、仲禮及び宣猛將軍の李孝欽、前司州刺史の羊鴉仁、南陵太守の陳文徹は、軍を合わせて新林王の游苑に屯す。粲は議して仲禮を推して大都督と為し、下流（張公洲）の衆軍に報ず。裴之高は自ら年位を以て、其の下に居るを恥じ、議して累日決せず。粲は衆に抗言して曰く、

「今者同じく國難に赴き、義は賊を除くに在り。**柳司州**を推す所以者、正に久しく邊疆を捍ぎ、先に**侯景**の憚る所と為り、且つ士馬は精銳なりて、其の前に出ずるもの無きを以てす。若し位次を論じれば、**柳**は**粲**の下に在り、其の年齒を語れば、亦た**粲**よりも少く、直だ社稷之計を以て、復た論ずるを得ず。今日の形勢は、貴ぶべきは將の和に在り、若し人心同じからざれば、大事は去らん矣。**裴公**は朝之舊德なり、豈に應に復た私情を挟みて以て大計を沮むべけんや！**粲**は請う諸軍の為に之を解かん。」

乃ち單舸にして**之高**の營に至り、之を切讓して曰く、

「今二宮は危逼し、猾寇は天に^{はびこ}る、臣子は當に力を戮せて同心すべし、豈に自ら相い矛盾す可けんや！豫州は必ず異を立てんと欲すれば、鋒鏑は便ち歸する所有らん（將に攻めるぞとの脅し）。」

之高は泣を垂れて謝を致す。遂に**仲禮**を推して大都督と為す。

■ **〔援軍と侯景の対峙〕** 宣城内史の**楊白華**は其の子の**雄**を遣わして郡兵を將いて繼いで至り、援軍は大いに集まり、衆は十餘萬、淮に緣りて柵を樹て、**景**も亦た北岸に於いて柵を樹て以て之に應じる。

■ **〔裴之高は子らを射る〕** **裴之高**は弟の**之横**と舟師一萬を以て張公洲に屯す。**景**は**之高**の弟の、侄、子、孫を囚え、水に臨みて兵を陳ね、鎖を連ねて陳前に列し、鼎鑊、刀鋸を以て其の後に隨え、謂って曰く、「**裴公**は降らず、今即ち之を烹ん。」

之高は善く射る者を召して其の子を射使め、再び發し、皆な中たらず。

■ **景**は歩騎萬人を帥い後渚（韋粲傳によれば、中興寺の前にあり）に於いて挑戰し、**仲禮**は出でて之を撃たんと欲す。**韋粲**は曰く、

「日は晩れ我は勞す、未だ戦う可からざる也。」

仲禮は乃ち壁を堅くして出でず、**景**も亦た引いて退く。

■ **〔蕭繹は江陵を出発〕** 湘東王の**繹**は銳卒三萬を將いて江陵を發し、其の子の**綏寧**（沈約志に、廣州南海郡に綏寧県あり、宋の文帝立つと）侯の**方諸**を留めて居守せしめ、咨議參軍の**劉之泥**等は三たび箋を上り留まるを請い、答教（蕭繹は自ら將として援軍する志無し、偽りて許さざる真似する）して許さず。

■ **〔蕭范の壽陽攻め〕** 鄱陽王の**范**は其の將の**梅伯龍**を遣わして**王顯貴**を壽陽に攻めしめ、其の羅城に克つ。中城を攻め、克たず而して退き、**范**は其の衆を益し、復た之を攻め使む。

東魏 **〔東魏の貨幣制度〕** 東魏の大將軍の**澄**は民錢の濫惡なるを患い、議して、

「民の私鑄を禁じず、但だ稱を市門に懸け、錢に五銖より重からざるは、市に入るを得る母からしめん。」朝議は以為く、

「年穀は登らず、請う它年を俟たん」

と、乃ち止む。

● **〔宇文泰の失敗〕** 魏の太師の**泰**は安定の國臣（宇文泰は安定公に封じられ、故に國臣有り）の**王茂**を殺し而して其の罪に非ず。尚書左丞の**柳慶**は諫め、**泰**は怒りて曰く、

「卿は罪人に黨す、亦た當に坐すべし！」

慶を前に執る。**慶**の辭色は撓^{たわ}まず、曰く、

「**慶**は聞く、(9-223p) 君は事に蔽われるを不明と為し、臣は知り而も爭わざるを不忠と為す。**慶**は既に忠を竭くし、敢えて死を愛^{おし}まず、但だ公が不明と為るを懼れる耳。」

泰は^{さと}廕り、亟に**茂**を赦さ使め、及ばず、乃ち**茂**の家に錢帛を賜り、曰く、

「以て吾が過^{あらわ}ちを旌す。」

■ 〔柳仲禮は韋粲を青塘の要地に屯せしむ〕 丙辰（52-23+1=30日）晦，柳仲禮は夜韋粲の營に入り，衆軍を部分す。旦日，會戦せんとす，諸將は各々據守有り，粲をして青塘に頓せ令む。粲は青塘を以て石頭の中路に当たり，賊は必ず之を爭わんと，頗る之を憚る。仲禮は曰く、
「青塘は要地なり，兄に非ざれば不可なり。若し兵少なきを疑えば，當に更に軍を遣わして相い助けるべし。」
乃ち直閣將軍の劉叔胤をして之を助け使む。

令和5年3月24日 翻訳開始 11087 文字 令和5年4月2日 翻訳終了 23118 文字